ペルソナ４　～仮面ライダー電王＆自称特別捜査隊～

霧紙子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ペルソナ４　～仮面ライダー電王＆自称特別捜査隊～

【Ｎコード】
Ｎ９４８９Ｇ

【作者名】
霧紙子

【あらすじ】
ＰＳ２ソフト『ペルソナ４』と、特撮ドラマ『仮面ライダー電王』を題材にし、合作させたファンフィクション作品です。作者解釈でのキャラクター造形と、原作設定の一部を改変したストーリー展開、または原作本編の核心に触れる内容であり、不快と思われる描写があります。現在、展開の構想中と劇場ディケイドにあわせたいため、しばらく休載させて頂きます…。申し訳ございません…。

２０１２年１月２９日（日）　「始まりはいつも突然」（前書き）

今ファンフィクション作品の仮面ライダー電王の設定や表現については、オリジナルの本編と、『仮面ライダーディケイド』の電王の世界、『劇場版仮面ライダー超・電王＆ディケイド』を参照にしています。また、今作品のストーリー展開ゆえ、一部の設定を改変させた部分もありますので、ご了承下さい。尚、時間軸はディケイドでの電王世界です。

２０１２年１月２９日（日）　「始まりはいつも突然」

２０１２年１月２９日（日）　晴れ

昼間

今日は、久しぶりにテレビの中に探索に向かうことにした。
テレビの中では、みんなが意気込んでいる。

「よっしゃあああ！ちょうど、退屈してたんだよな…」

と、いつもより赤い陽介が意気込んでいる。

「ハハッ…、まぁ、確かに、先輩の言うとおり、たまの運動もいいかもね…」

いつもより青い完二も意気込んでいる。

「ぐがー、ぐがー」

いつもより、筋肉質なクマがいびきをかいて眠っている。

「へっ、へーんだ！」

いつもより、紫な直斗がブレイクダンスをして、はしゃいでいる。

「我も参加させてもらおう…」

いつもより白いキツネは、羽根をなびかせている。

…？

アレ？今日は、千枝、雪子、りせが居ないな…。

用事でもあったか？

そう思い、このメンバーのまま、テレビの中へ探索に向かった。

ダンジョン、地下研究所に居るシャドウを倒しに向かった。

目の前に、巨大なシャドウが現れた。

「おい、危ねぇぞ！」

そう言って、赤い陽介が自分の体内に入った。

なんと、陽介に自分の身体が支配され、髪の毛が逆立った。

「へっ、見せてやるぜ…、クライマックスって奴をな！！！」

そして、陽介に支配された身体のまま、ベルトとパスを取り出した。

ベルトを腰に付け、パスをベルトに当てた。

「変身！！」

すると、自分の身体は見る見ると、謎のライダースーツ姿に変身した。

赤い桃太郎の異形の姿だ。

すごい！陽介には、人に憑いたり、変身したりする能力があったとは…。

「俺、参上！！へっへ…、行くぜ！行くぜ！」

ポーズを決めると、ベルトから剣を取り出し、目の前のシャドウをなます斬りにした。

すると、今度はいつもより青い完二が…。

「先輩ー、次は僕…」

と言って、完二が自分の身体に入り込み、陽介を追い出した。

「おわっ！てめ、亀！！」

凄い！完二にも、人に憑いたりする能力が！！

完二が憑くと、ライダースーツの姿が、浦島太郎のような姿に変わった！

「お前たち…、僕に釣られてみる？」

持っていた剣をロッドに変え、完二は目の前のシャドウ達をさらに蹴散らす。

「ふっ…、お前たち、イマジンより弱すぎて泣けちゃうよ…」

「泣ける！？」

さっきから寝てばっかりのやけに筋肉質なクマが目を覚まして、立ち上がった。

「うわ！しまった！？」

なんと、クマも自分の身体に入り込み、完二を追い出した！
クマが身体に入ると、ライダースーツは金太郎のような姿に変化した。
凄い！クマにも、こんな能力が！

「俺の強さに、お前が泣いた…」

持っていたロッドを、斧に変え、クマが目の前のシャドウを豪快に蹴散らす。

「あーん！もうさっきから、みんなばっかり！僕も！」

やけに紫な直斗に、今度は憑かれ、身体から、クマが飛び出した。
凄い！直斗もか！
直斗に憑かれると、ブレイクダンスをしながら、身体が龍の子太郎のような姿に変化した。

「お前たち…、なにも言わないけど…、倒してもいい？」

持っていた斧を、銃に変え、直斗は容赦なくシャドウに発砲。

「答えは聞かないけどね！」

凄い！あっという間に、直斗はシャドウを全滅させた。

「我が出番は…」

と、いつもより白いキツネが嘆いている。
凄い！凄いぞ！今日の自称捜査隊のメンバー！！
ベルトを外すと身体から、直斗が飛び出した。

そして、姿が元に戻った。
みんなに、今日は凄いと言った。
すると、いつもより赤い陽介が…。

「あっ、あれ？お前…、良太郎じゃねぇ…、誰？」
「あっ？先輩…、気になってた？」
「俺もなんか、さっきから、良太郎とちがうんやないかと…、思ってたんやが…」
「あっ、この人、良太郎じゃないよ！」

よく見たら、陽介は鬼みたいな姿をしている…。
よく見たら、完二は亀みたいだ…。
よく見たら、クマは確かに熊だが、関西弁を話している…。
よく見たら、直斗はいろいろ違っている…。
キツネに至っては、お前、鳥じゃん…。

沈黙の空気だ…。
お前ら、誰だと！？叫んだ。
勇気が高まった。

「「「「「こっちの台詞だ！？」」」」」

謎の人型全員から、ツッコまれた。

『劇場版　仮面ライダー電王&自称捜査隊　～クライマックス刑事&クライマックス番長～』

テレビの中、入り口広場へ戻ることにした。
一通り、自己紹介を済ませた。
赤いのが、モモタロス…。
青いのが、ウラタロス…。
筋肉質なのが、キンタロス…。
紫なのが、リュウタロス…。
鳥は、ジーク…。
自分は、ペルソナ４の主人公だと告げた。

「こいつ、俺らの姿見ても、まったく驚かないぞ…」

モモが、そう言った。
ペルソナとか、シャドウに比べると、彼らの姿なんかは可愛いものだ…。

「にしても、先輩…。僕らは、デンライナーに居たはずなんですけどね…」

ウラは顎に手を当てた。
キンタロスは眠っている。
リュウタはブレイクダンスをしている。
ジークはお茶を飲んでいる。

「まさか…、イマジンによる、また時間の歪みかよ…」
「そうみたいだね…。また時間の歪みで、別の時間に飛ばされたみたい…。それで、デンライナーのみんなや、良太郎達と離れてしまったみたいだね…。元の時間に戻るには、この世界に居る時間軸変えたイマジンを倒すしかないみたいだ…」

「ちっ、面倒なことになりやがったぜ！！」

とりあえず、モモとウラは上手いこと状況をまとめてくれた。
なんだか解らないが、話を進めてくれたので感謝した。

よく解らないがタロウズメンバーとの間に、絆が芽生えた…。

『世界』のアルカナ…、タロウズメンバーとのコミュニティを手に入れた。

とりあえず、今日は、彼らを連れて帰ることにした。
テレビから出ると、タロウズは砂のようになった。

「どうやら、このテレビの中じゃねぇと、実体保てないようだな…」

モモが砂になった自分の体を見て嘆いた。

夜

菜々子と過ごすことにした。

「お兄ちゃん、今日は、砂だらけだね」

翌日　晴れ

朝

「うーっす！」

教室に行くと、陽介が目の前に現れた。

そういや、昨日は探索に行くと陽介の携帯にメールしたのに、すっぽかされた…。

「すっ、すまねぇ…、昨日は、その…、ジュネスのバイト仲間達から合コンに無理矢理誘われてよ…、携帯に気付かなかった…」

陽介は申し訳なさそうだった…。

すると…。

いきなり、モモが現れて、自分に憑いた！

自分の髪の毛が逆立ち、モモが憑いた自分の手が乱暴に陽介の襟首を掴んだ。

『合コンだと！てめぇ！？こいつは、昨日、1人で惨めな目にあってんだぞ！ああ？コラ！！』

「ひぃいいー！！悪かった！悪かったよ！悪かったよ！相棒！！」

モモを抑えようとしたが、かなり怒っている…。

モモが憑依した自分は陽介の身体を持ち上げた。

「あっ、相棒…」

陽介は泡を吹いている。

すると、ちょうど、よく現れた千枝が止めに入った。

「ちょっ！すげぇ！じゃなかった！！なにやってんの、あんたら！？」

千枝が、モモ憑依の自分の腕を握った。
すると…。
今度は、ウラタロスが自分の身体に入り、モモを追い出した。
いつの間にか、自分はメガネをかけている…。
ウラが憑依した瞬間、陽介から手を離した。
ギャウ！と声を出して、陽介が落ちた。
ウラ憑依の自分が千枝の手を掴んだ…。

『君、綺麗な手をしているね…』
「へっ！ちょっ！なに？」

千枝が赤くなっている。

『どう？学校なんかサボって、僕と個人レッスンしない？』
「えっ、ちょっ…、なっ、なにを言ってるの！？」

すると、気絶している陽介が立ち上がった。
陽介の髪の毛が逆立って、瞳が赤くなっている…。
まさか…。

『てめえ！？なに、やってんだ！このスケベ亀が！！』
『先輩も、短気すぎるよ…。まったく、本当に単砂細胞なんだから…』

陽介はモモに憑依されている…。
モモ陽介は、ウラ憑依の自分の襟首を掴んだ。
千枝は、頭が混乱している…。

「なっ、なによ…、これ…。二人とも、もしかして、しゃ、シャド

ウ…」

しばらくすると、金色の光が千枝に憑いた。
千枝の服がいきなり和服なり、目が金色になった。
まさか…。

『やめんか！モモの字！亀の字！』

千枝の声が、ごつくなった…。
どうやら、千枝はキンタロスに憑依されたらしい…。
キン千枝は、喧嘩しているモモ陽介、ウラ自分の仲裁に入って腕を握った…。
かなり力強く痛い…。

『いてぇよ！クマ公！』
『痛い！痛いってば、キンちゃん！』

しばらくすると、雪子が現れた。

「あら？なにをやっているの？」

このカオスな光景を、雪子は不思議そうに見ている…。
すると…。
紫色の光が自分の身体に入った…。

『うわっ！リュウタ！』

ウラが身体から出てきた。
どうやら、リュウタが自分に憑依したらしい…。
帽子、コートを羽織って、『いーじゃん！いーじゃん！すげーじ

ゃん！』のラップがどこからか流れ始め、リュウタ憑依の自分がキン千枝の手を払い、踊り始めた。
しかも、教室に居たクラスメイト達も踊り始めた…。マ〇ケル・ジャクソンのＰＶのように…。
かなりカオスな光景になった…。

『あっ、お姉ちゃんー！抱きついてもいい？』
「へっ？」

どうやら、雪子はリュウタの好みか、あるいは、雪子の雰囲気が誰かに似ていたらしい…。
リュウタ憑依の自分が、雪子に抱きついた。

『答えは聞かないけど！』
「ちょ、ちょっと！なっ、なにを！！」

雪子は、顔がかなり赤くなっている…。

『やめんか！リュウタ！』

キン千枝が、リュウタ憑依の自分のコートを猫掴みした。
すると、いつの間にかＢＧＭが止まり、みんな踊るのをやめた。

『うわっ！』

とりあえず、雪子から離れ、気合いを入れて、身体からリュウタを追い出した…。
元に戻ったようだ…。
すると、千枝の身体からもキンタロスが出てきた…。

「はっ、なに？今の！？」

元に戻った千枝は驚いて、周囲を見渡している…。

「うわ！なにこれ！」

そして、砂になったウラタロス、キンタロス、リュウタロスに千枝は驚いた。

こうなった以上…、みんなに事情を説明するしかないようだ…。

『意外と、使い勝手がいいな…、こいつの身体…』

モモは陽介の身体が気に入ったらしく、ゴーゴーダンスをしている…。

雪子は、顔を真っ赤にして気絶している…。

２０１２年１月３０日（月）　「僕の目の前に広がる光景は、凄くカオスだけど

２０１２年１月３０日（月）放課後　晴れ

テレビの入り口広場で、陽介、千枝、雪子、完二、りせ、直斗、クマに、家で寝ているジーク以外の実体化したタロウズ達を対面させた。

みんな、ペルソナとか、シャドウで慣れているせいか、あまり驚かないで居る…。

とりあえず、タロウズ達が、謎のイマジンのせいで、この世界に居るなどの詳しい説明をした。

「今朝の騒ぎは、てめえの仕業か…」

陽介は、朝のことを気にしてか、実体化したモモにつかかっている…。

「ちっ、てめえが合コンとか抜かすからだろ…」

「なんだと！モモちゃんとか、可愛い名前のくせに、鬼の姿しやがって！」

「んだと！ハナクソ野郎！」

「くっ、てめえ！」

陽介、モモが睨み合っている…。

「ちょっと！やめなさいよ！二人とも…」

千枝が二人の止めに入るが、ウラが現れて…。

「いやぁ、今朝はごめんね…。千枝ちゃんだっけ？可愛い名前だね…」

とウラは、千枝を口説き始めた。

だが、千枝は問答無用に、ウラの顔に靴跡を残した…。

「つ、釣れないな…」

「おめぇ、相手が悪いよ…」

倒れたウラを、完二が介抱している…。

睨み合っているモモと陽介を仲裁する千枝。

「ちょっと、雪子も見てないで助けなさいよ！」

「へっ…、なぁに…、千枝っ…」

雪子は冷えぴたを頭にし、赤い顔で、ぼーっとしている…。

しかも、やけに色っぽい声だ…。

「ごっ、ごめん…、休んでていいよ…」

千枝は、雪子に謝っている。

「むっ、なんや、お前？」

今度は、キンタロスとクマが睨み合っている…。

「クマは、クマクマ！」

クマはいつもの着ぐるみで、キンタロスをじろじろ見ている。

「俺も熊や…。同じ、熊でもお前は弱そうやな…」
「なっ！なんだと！クマ、こんな侮辱はじめてだクマー！！」

こちらも、険悪な雰囲気だ…。

「お前、僕より小さいー、ははー！」
「先輩…、助けてください…」

あちらでは、直斗がリュウタに絡まれている…。

「ちょっと…、先輩…、このカオスな雰囲気なんとかしてよ…」

りせが助けを求めてきた…。
落ち着け！と叫ぼうと思った瞬間…。

「はぁ…、やっと、二人とも静かになった」

モモと陽介の仲裁をしている千枝が汗を拭っている…。
どうやら、仲直りに成功した…。
と思っていたら、モモと陽介が靴跡だらけで地面に倒れている…。

「いいかい、完二君…、女の子ってのはね…」
「へーっ、なるほど…」

ウラと完二は、いつの間にか、なにかを語り合っている…。

「なかなかやるな…、お前」
「お前もクマ…」
「俺とお前、同じ熊同士、真に強さを極めた者同士や…」

「フタエノキワミ、クマ…」

なにをしたかは解らないが、キンタロス、クマは熊同士、意気投合した…。

リュウタは、直斗をいじるのに飽きたのか、絵を描き始めた…。

どうやら、なんとか、みんなまとまったようだ…。

「「まとまってねぇよ！！」」

陽介、モモが口を揃えて叫んだ。

りせに頼んでもらい、テレビの中をペルソナでサーチしてもらった。

「ごめん、ダメ…。何かの気配はあるんだけど、なんか、また霧が濃くなってて…。しかも、手掛かりがまったくないし…」

どうやら、霧の中に、何かが隠れているのは確からしい…。

「たぶん、その何かが、時間軸を狂わせたに違いねぇ…、霧の中だが、イマジンの匂いがしやがる…」

モモが、そう言った。

りせは更にサーチをしたが、なにも発見出来なかったようだ…。

「とりあえず、イマジンとかいうのの気配はあるけど、人の気配は

ないし、今は誰もさらわれていないみたいだから、なにか状況が動くまで待つしかないわね…」
「しばらくは、デンライナーに戻れねぇか…」

モモは苛立っている。
落ち着け、となだめた。

「ああ…、わかってるけどよ…。チクショウ…、どうすりゃあいいんだ…」

モモは不安なようだ…。
とりあえずは、しばらく、このテレビの中に住めばいいと、モモに言った。

「なっ、本当か！」

モモは嬉しそうだ。

「すっ、すまねぇな…」

気にするな…、と言った。
タロウズ達からの信頼を感じる…。
また、少し絆が深まった。

今日は、退散することにした…。

ジュネス、家電コーナー。

テレビから出てくると、陽介が力みだっている。
「いいのかよ！あんなわけの解らない奴らと協力なんかして！！」
しかし、完二は鼻血を流しながら…。
「でも、悪いような奴らじゃねぇと思うッスよ…」
「なんで、完二君は鼻血垂らしてるの…？」
「うっ、うん…、なぁに、ちっ、千枝？」
「いや…、なんでもないから…、あんたは今日はよく休みなさい…」
千枝は、気の抜けた雪子の肩を持っている…。
雪子の顔は、冷えぴただらけになっている。
「キンタロスは、いいクマクマよ！」
クマが陽介に楯突いている。
「りせも、確かに、あの人達の見た目変だけど、悪い人達じゃないと思う…」
「僕は、花村先輩と同意見かな…」
直斗は、かなり機嫌悪そうだ…。
「あんなわけのわからない奴らなんて、信用出来るかよ！特にあの赤い奴、異様に頭悪そうだしよ！！」
陽介が、そう叫ぶと…。
テレビから赤い光が出てきて、完二に憑いた…。
完二の目が赤くなった。

『誰が、頭悪いだ！この野郎！！』
「げっ！聞いてやがった！！しかも、よりによって完二に憑きやがった！！」

モモが完二に憑いたようだ…。
陽介と、モモ完二がまた喧嘩を始めた…。

「ちょっ、花村！モモタロス！」

千枝が、また二人の喧嘩を止めようとしていると…。
今度は、テレビから青い光が出てきて、千枝に憑いた。
たぶん、千枝はウラに憑かれたのだろう…。

『たまには、女の子に憑くのも悪くないね…』

ウラ千枝は眼鏡を直して、今度は、雪子の手を握った…。

「えっ、どうしたの？千枝？」

雪子は驚いている。

『キミ…、綺麗な手をしているね…。女子高生女将なんだって？じゃあ、これから、浴衣姿の君と僕とで一緒に個人レッスンでもしたいなぁ？』
「ちっ、千枝！！こっ、個人レッスン！？ちょっ、ちっ、千枝…」

また雪子は顔が赤くなり、頭から煙が出てきた…。
そして…、また気絶した…。

『うわぁ！！大丈夫！どうしたの！？』

ウラ千枝は焦っている…。

今度は、金色の光がクマに憑いた…。

『うん！しっくりきおるでぇ！』

キンタロスに憑依されたクマが、しこを踏み始めた…。

直斗の方を見ると、直斗がリュウタに憑かれたようだ…。

『イエーイ！！』

リュウタ直斗は、ブレイクダンスを踊り始めた…。

「うわっ、直斗！すごい！どうやったの！？」

りせは、リュウタ直斗のブレイクダンスに見入っている…。

ジュネス家電売り場が、混沌としてきた…。

しかも、ギャラリーが増えてきた…。

そっとしておこう…。

このまま、真っ直ぐに帰宅した…。

夜

自宅に戻ると…。

「お兄ちゃん！みて！みて！鳥さんの形をした砂が喋っているよ！」
「おおー、帰ってきたか、我が家来よ…。予は、姫と戯れていたぞ…」

菜々子と、ジークが戯れている…。
今日は、頭痛薬を飲んで眠ることにした…。

２０１２年１月３１日（火）　「新しい未来へと続く道に変わるのだろう」

２０１２年１月３１日（火）
タロウズ達と会って、三日目　晴れ

朝

どうも頭痛が治らない…。
下に降りると、堂島が煌びやかな姿で朝食を食べている…。
『うん…、姫…、結構な…、おてまえで…』
「結構な…？おてまえ…？お兄ちゃん、おてまえってなに？」
どうやら、堂島はジークに憑かれようだ…。
今日は、朝食はいらないと言って、学校へ向かった…。

学校に着くと、陽介がボロボロの姿で机にへばっている…。
「くそっ…、あの、あのモモ公が…」
そっとしておこう…。
千枝は、フラフラと机まで歩いてきた。
「雪子…、熱出して休みだって…」
そう言って、千枝は机に倒れ込んだ…。

昼休み

「ちーっす…、じゃなかった…、おはようございます…。先輩…」

階段を歩いていると、完二が目の前に現れた…。

だが、いつも様子が違う！

いつものラフな姿じゃなく、キチッとした服装と髪型。

しかも、やけに紳士的だ…。

「驚きましたか？先輩…、昨日、ウラタロス君と話してから、今までの自分を恥じました…。これからは、紳士的に女性に優しくなります…。では…」

それだけ言うと、完二は目の前から消えて行った…。

なにが、なにがあった…。

「あっ、先輩…」

今度は、元気のないりせが現れた…。

「昨日、先輩いなくなったあと、ウラタロスってのから、ナンパされて…、かなりしつこくて…。あと、今日、直斗君、全身筋肉痛で休み…」

それだけ言うと、りせはフラフラと教室へ戻って行った…。

どうしよう…、タロウズとの出会いは、みんなになにかしらのダメージを与えている…。

放課後

陽介、千枝と帰ることにした。

「どうすんの、これ…。完二君以外は大ダメージだよ…」

フラフラしながら、千枝は相談してきた…。

いや、むしろ、完二の方が大ダメージだと答えた。

「クマの奴は、今日の朝、売り場の器具で筋トレ始めやがったよ…。くそ！あのモモ公！ぎったぎったのメタクソにしてやる…」

陽介は怒りだっている。

「あたし、雪子の見舞え行くから、じゃあね…」

そう言って、千枝は途中から別れた。

途中で、ウラに憑かれるな、と警告しておいた…。

商店街近くに来た…。

「なぁ、相棒…。あいつら、得体しれねぇし、さっさとテレビの中に居るイマジンてのをやっちまわねぇか？」

場所が解らない上に、むやみに行くのは、無謀だと言った。

だが、こちらで霧が出る日、向こうで霧がなくなる日まで、なんとかしなければと言った。

「えっ？なんでだよ…」

入り口広場とはいえ、向こうの霧が晴れたら、タロウズ達が暴走

したシャドウ達に襲われるかもしれない…。彼らは精神体とはいえ、テレビの中で、実体を持ってしまえばシャドウに襲われても無事という保障がない…。彼らが無事だったとしても、元凶であるイマジンを見つけ出すことは、永遠になくなるかもしれない…。
それに、元から、あの世界に居たクマは別として、一昨日、間違ってタロウズ達と捜索したときに、シャドウがタロウズ達に襲い掛かってきた…、と陽介に話した…。

「そっ、そうか…。いつもと同じように、霧が出る日が勝負か…」

陽介は少し複雑な表情をした。
やはり、陽介もなんだかんだで、タロウズ達が気になっている様子だ…。
とにかく、向こうの世界の霧が晴れるまで、なんとかしなければ…。

しばらく、陽介と話し込んでいると…。
どこからか、黒い煙が…。

「なっ、なんだ！！」

陽介と一緒に、煙の元へ向かった。

「火事だぞ！」

野次馬達が騒いでいる。
どこかの民家が大きな火を上げて燃えている！
これは、全焼のようだ…。

陽介は驚いている。

「うわっ、こりゃ…、ひでぇ…」

すると、消防士から介抱されている火事になった民家の子どもが叫んでいる。

「シロが！シロが！」

と泣け叫んでいる。

どうやら、その様子から燃えている家の中には、子どもが飼っている犬がまだ居るらしい…。

だが、消防士はわかった、わかったと言い、助けに向かう様子がない…。

「シローー！！」

子どもが悲痛に叫んでいる。

野次馬達は見ているだけだ…。中には、携帯で写真を撮っている者も居た…。

「チクショウが！おい、お前は俺のカバン預かってろ！」

その様子に、腹を立てた陽介が野次馬を掻き分け、その子の前に行った。

「おい！シロってのは、どこに居る！！」

「えっ、一階の茶の間…！白いちっちゃな犬！」

「わかった！」

陽介は、どうやら子犬を助けに行くようだ。
しかし、消防士や警察が、陽介を止めた。
「君、危険だから離れなさい！」
「うるせぇ！だったら、あんたらが助けに行けよ！くそ、離せ！」
すると、陽介の身体に赤い光が…。
モモタロスだ！
モモタロスが陽介に憑依した。髪の毛が逆立っている。
『離しやがれってんだ！この野郎が！！』
モモ憑依の陽介は、警察官、消防士を吹っ飛ばした。
しかし、更に、警察官、消防士がモモ陽介の体を止めた。
すると、今度は、リュウタロスが自分に憑依した…。
そして…。
『子犬、助けてあげないと！』
そう言って、リュウタ憑依の自分が指を鳴した。
あのＢＧＭがかかり、警官、消防士達を踊らせた。
その隙に、モモ陽介が火事の現場にツッコんで行った…。
『恩に着るぜ！リュウタ』
『へっへーん！』
しばらくすると、無事にモモ陽介が白い子犬を抱えて戻ってきた。
『ほらよ！ったく…』

モモ陽介が、子犬を子どもに渡した。

「ありがとう！お兄ちゃん！シロ、良かったね！」

モモ陽介は子どもに礼を言われると照れて、そのままどこかへ逃げて行った。

自分からリュウタが出て行ったので、あとを追い掛けることにした。

川原に、陽介と砂状態のモモが居る。

「ったく、おめぇ…。ムチャクチャしやがって…。ケガでもしたら、どうするつもりだったんだよ…」

モモがモジモジと陽介の周りをウロチョロしてる…。

陽介は笑いながら…。

「とか言いながら、お前、俺が怪我しないように、家の中に入った瞬間、電王だかに変身したくせに…」

「あっ、あれはだな！！」

「ハハハ…」

「くっ…」

「モモタロス…、お前、見直したよ…」

「あん？」

「悪かったな…、いろいろと疑ったりして…」

陽介がそう言うと、モモタロスは鼻をこすり…。

「いいってことよ…」

すると…。

「って、うわあああ！！」

いきなり、モモタロスが叫んだ。

「どうした？モモタロス！」

「やべぇ！犬苦手なのに、犬触っちまった！！」

「リアクション、おそ！」

陽介は大きな声で笑った。

モモタロスは罰が悪そうにして、騒いでいる。

とりあえず、二人を、そっとしておくことにした…。

夜

帰宅すると、煌びやかな姿の堂島がソファーで横たわって眠っている…。

まだ堂島に、ジークが憑いているようだ…。

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！あのね！今日、お父さんがお仕事行かないで、1日中、菜々子と遊んでくれた！」

菜々子は、とても喜んでいる…。怒るべきか、喜ぶべきか複雑な気持ちになった…。

頭痛薬がなくなりそうだ…。

２０１２年２月１日（水）　「夢で逢えたなら…」

２０１２年２月１日（水）
タロウズ達と会ってから、四日目…。
昨日の晴天から天気が崩れ、雨が降り始めた…。

朝

復帰した雪子が、教室でチラチラと顔を赤くして、自分を見つめている…。

「あっ、おっ、おはよう…、なっ…、なんかあたし、ここ最近、変な夢ばかり見てたみたい…」

どうやら、ショックからは立ち直れたようだが、まだタロウズ達について、よく理解していないようだ…。
そっとしておこう…。

昼休み

『んでよー、その良太郎ってのがよー、かなり不幸な奴でよー』
「あはは！それ、本当かよー！」

教室では、モモが憑依した千枝と陽介が楽しそうに談話している。
そして、階段を歩いていると、元の服に戻った完二が泣きながら歩いている…。

「ちっ、チクショウ…。あの亀野郎に騙された…」

完二は泣きながら、教室へ戻って行った…。
だから、なにがあったのだ…。
今度は、直斗が現れた。　まだ、筋肉痛が回復してないらしくヨロヨロだ…。

「きっ、奇遇ですね…、せっ、先輩…」

無理しなくていいと、直斗に告げた…。
寛容力が高まった。

放課後

何故か、いつもと違った目で自分を見つめている雪子と一緒に帰ることにした。
傘をさして歩きながら、改めて、詳しい事情を話した…。

「そっ、そうなんだ…。じゃあ、あの時、抱きついたのは…」

雪子は元に戻ったが、何故か、落ち込んでいる…。

このまま、雪子とジュネスに寄ってみた。
キンタロスが憑依したクマが、大きな箱を持って、かなりの労働している…。

『こないな荷物、俺がしょったるわ！』
「今日の熊田さん、凄く男らしいわ！」

パートのおばさんが、キャー、キャー騒いでいる。

だが、このあと、キンクマは力が入りすぎて、荷物を締め潰してしまった…。
見ないフリして、雪子と逃げた。

屋上のフードコートのテントの下では、リュウタが憑依した直斗と、りせがお絵描きして遊んでいる。

「あっ、リュウタ君ー、絵お上手ー！」
『りせちゃんに誉められた！』

リュウタ直斗に指を差して、アレがこないだ自分に憑いたと、雪子に説明した…。

「あっ、あれが…」

すると、リュウタ直斗が、こちらに気付いた。

『あっ、お姉ちゃんだ！』

リュウタ直斗は、喜びの表情で雪子の元に近づいた。

「うわっ、ちょっと…」

雪子は戸惑っている…。
すると、りせが…。

「先輩、雪子先輩も一緒にお絵描きして遊ぼうよ！」

と言った。

『ねぇねぇ、お姉ちゃんも！一緒にお絵描きしてよ！』

リュウタ直斗が、雪子にねだっている。

そんな無邪気なリュウタロスの姿に、雪子は頬笑んだ。

「うっ、うん！いいわよ」

『やったー！！』

自分も、みんなでお絵描きを過ごそうかと思っていると…。　駆け足で、陽介がエレベータから飛んできて、自分に泣きついてきた。

「助けてくれ！クマの野郎が、次々と品物ブッ壊してやがる！！」

やっぱりか…。

すると、自分にモモタロスが憑いた。

『あのクマ公！ジュネスに迷惑かけやがって！！行くぞ、陽介！！』

だが今度は、陽介にウラタロスが憑いた…。

ウラ陽介は、メガネを掛け、軽快なステップで、テントの下の雪子、りせの方へ向かう…。

『ごめんねー？君達…、うちのリュウタが面倒を掛けて…』

「へっ？花村君？」

「うわっ、また出てきたよ…」

ウラ陽介が、リュウタ直斗の頭を叩いている。

雪子は戸惑い、りせはうんざりした顔をしている…。

すると…。

「見つけたぞ…！亀公…」

いきなり、ウラ陽介の後ろに、完二が現れた。
ウラ陽介の顔が曇っている…。

『うわっ！かっ、完二君…、どうしたの？』
「どうしたじゃあねぇ…、よくも…、よくも騙しやがったな！！」

すると、雨の中、ウラ陽介は逃げ出した。
完二は泣きながら、ウラ陽介を追い掛けた…。

「まちやがれ！！」

一体、完二はなにを騙されたのだろ…。
すると、自分の身体から、モモタロスは飛び出し、砂状態で完二と一緒にウラ陽介を追い掛けた。

「おい！陽介ー！ジュネスがピンチだぞ！！」
「待て！まちやがれ！亀野郎！！絞めてやる！キュッ！と絞めてやる！」

…。
りせは頭を抱えた。

「先輩…。あたし、頭痛してきた…」

自分も、こないだから頭痛が止まないと言った…。
フードコートのテントの下では、仕切り直して、雪子とリュウタ直斗が絵かきを始めた。

「うわぁ！リュウタ君、絵上手だよ」
『へへっ…』
あちらは、仲良くやっているようだ…。
いろいろ気になるが、今日は、もう帰ることにした…。
夜
帰宅すると…。
「お兄ちゃん！お兄ちゃん！お父さんが、またお仕事休んで遊んでくれたよ！！」
ジーク堂島が、ソファーで紅茶を飲みながら、天気予報を見ている…。
『どうやら、明日、明後日も雨のようだな…』
頭痛薬を持って、二階へ上がった…。
自室
雨が降り続いている…。
まさかとは思うが、一応、マヨナカテレビを確認することにした

…。

午前０時…。

！！

なにやら、ボンヤリと人の形が映った…。

映像は荒いが、シルエットからして、明らかに人間の姿ではない…。

画面は消えた…。

もしかすると、アレは…、タロウズ達をこの時間に飛ばした元凶のイマジンの姿ではないだろうか…。

しばらくすると、自分の携帯電話が鳴った。

りせからだ…。

「もしもし…、先輩？」

やはり、りせもマヨナカテレビを確認したようだ…。

「今日も帰りに、テレビの中でサーチしても、やっぱり、姿が解らなかったよ…」

とりあえず、今回は人がテレビに放り込まれていないようだし、まだ様子を見るしかないと、りせに告げた。

「そっ、そうだね…。あと、先輩…」

さらに、りせはなにかを言おうとしている。

「今日、リュウタ君と遊んでて思ったんだけどさ…。確かに、リュ

ウタ君達…、雪子先輩と遊んだりして、楽しそうだったけどさ…。リュウタ君、元の世界の絵ばかり描いてたよ…。やっぱり、元の世界に帰りたいのかも…」

…。

自分もそう思っていたと、りせに告げた…。

「うっ、うん…。花村先輩達も解っているとは思うけど…。なんか…、たった数日前に会ったばかりなのに、なんか別れなきゃならないと思うと、寂しいなんて感じちゃう…。先輩も春には帰っちゃうんだよね…」

電話の向こうのりせの声は寂しげだ…。

りせに、気持ちは解るが、ちゃんとタロウズ達を元の場所へ返してやろう…、と言った。

「うん、わかった…」

りせは電話の向こうで、頷いた。

電話を切ろうとすると…。

「先輩…！リュウタ君が言ってたけど、モモちゃんが、昔、良太郎って人と喧嘩しちゃったとき、こう言って、仲直りしたんだって…。『大切なのは、今だ』って…！モモちゃん、見た目に似合わず、カッコいいこと言うね！」

そう言って、りせは電話を切った。

今日は、もう寝ることにした…。

ん？
ここは、ベルベットルームのようだ…。
また、夢の中で呼び出されたのだろうか…。
だが…、イゴールや、マーガレットの姿が見えない…。
「なんだ…、ここは？」
！？
目の前に、見慣れないピンク色の異形のライダースーツが現れた。
タロウズ達が変身した電王とも違う姿だ…。
「！？」
向こうは、こちらに気付いたようだ…。
「お前はなんだ？どこの世界のライダーだ…？いや、どこの世界の敵だ…？」
なんのことだ、と答えた？
「しらばっくれるな…」
そう言って、ピンク色の姿は、一枚のカードを取り出した…。
どうやら、なにか誤解されている…。
！？
ピンク色の姿の手にあるカードには、モモタロスが変身した電王

ソードフォームの絵が描かれている！
「なに？お前、モモタロスを知っているのか？」
うん、と頷いた。
そして、今までの経緯などを話した。
「なるほど、大体、解った…」
ピンク色は、両手を撫でながら頷いた。
本当に理解したのだろうか…。
「そういや…、ちびまる子ちゃんから、モモタロス達が居なくなったって、違う世界越しに言われてたっけな…」
そう言って、ピンク色は一枚のカードを自分に渡した。
カードには、モモタロスの姿の絵と、２００９年５月２０日との日付が書かれている…。
なにかのチケットのようだが…。
「協力してやりたいが…、俺はもう電王の世界でやるべきことはやった…。それに、俺の力が必要なら、俺がお前の居る世界に飛ばされているはずだしな…」
なんのことだか解らないが、どうやら、ピンク色はなんだかんだで、一応はモモタロス達の味方のようだ…。
「要するに、お前達でなんとかしろってことだ…」
口は悪いが、なんだかんだで、協力してくれたピンク色に礼を言

った…。

「あっ、まぁ、まぁ、気にするな…」

一応、名前を訪ねた…。

「通りすがりの仮面ライダーだ…。覚えておかなくていい…」

そう言って、仮面ライダーと名乗ったピンク色は、ベルベットルームから消えて行った…。

『仮面ライダー』…。

もしかすると、タロウズ達は仮面ライダーというヒーローなのだろうか…。

２０１２年２月２日（木）　「君のままで変わればいい」

２０１２年２月２日（木）
タロウズ達と出会ってから、５日目…。
午後から、少し雨が弱まるらしいが、夜も雨らしい…。

朝

どうやら、変な夢を見ていたらしい…。
下に降りると、やはりジーク堂島が優雅に紅茶を飲んでいる…。
「お父さん、お仕事しないの…？」
さすがに、菜々子も不安になってきたようだ…。
『うむ？仕事…。貴族である、この私が仕事とは…』
菜々子は泣きそうだ…。
『ややっ…、解った…、姫の頼みであるなら仕方あるまい…』
嫌々、ジーク堂島が立ち上がった…。
ジーク堂島に警察署が仕事場だと教え、このまま、菜々子と学校へ向かうことにした…。

放課後

千枝の特訓に付き合うことにした。
雨が少しだけ止んだ川原で、千枝が特訓を始めた。
「よーし！気合い入れるぞー！！」
すると、自分の身体に金色の光が入り込んだ。
…。
自分はいつの間にか着物を着て、髪の毛を結んでいる…。
どうやら、キンタロスに憑かれたようだ…。
「うわっ！憑かれてる！」
『ほう、特訓か！ええで！つきおうたる！』
キンタロス憑依の自分が、胸を叩いている…。
痛い…。
「よしっ！じゃあ、まずは、ウサギ飛び！」
『おおう！』
前フリなく、千枝とキンタロス憑依の自分が特訓を開始した…。
かなりハードな特訓になった…。
根気が高まった。
特訓を終え、川原のベンチに千枝とキンタロス憑依の自分が座った…。
「なかなか、やるわね！キンタロス君」
『お前さんも、なかなかやったで！』

二人とも肉体派同士のせいか、意気投合している…。
千枝は今日の特訓に、かなり満足気だ…。
だが…。

『せやけど、千枝の字…』
「ん？」
『お前さん、なんか焦っておらんか？』

千枝は、あっけらかんとなった…。

「えっ？なんのこと？」
『ごまかんさんでも…、互いに汗を流した仲や…。動きで解る…。
お前さん、なんか、焦っとるというか…。思い詰めておらんか？』

千枝は立ち上がった。

「べっ、別に、焦ってなんかいないわよ！！」

凄い勢いだ…。
どうやら、キンタロスは千枝の地雷を踏んでしまったらしい…。
すると、今度は青い光が自分の身体に入ってきた。

『うわっ！』

キンタロスが身体から飛び出し、砂状態になった…。
自分はメガネを掛けて、髪の毛をなびかせている…。

『ダメだって…、キンちゃん…。女性を詮索する真似なんて、不粋だよ…』

どうやら、ウラタロスに憑依されたらしい…。

「コラ！亀の字！空気よめへんのか！？けーわいやぞ！けーわい！」

『いつも、キンちゃん…、空気読んでないくせに…』

すると、背後から、鋭い殺気を感じた…。

『はっ！？』

ウラタロス憑依の自分が振り向くと、いつの間にか、完二が…。

「みっ、見つけたぞ…、亀公！」

『うわー！！完ちゃん！！』

凄まじい形相で、完二はウラタロス憑依の自分を睨んでいる。

「今日こそは、亀汁にしてる！！」

『あっ、土手で直斗君が水着で歩いている…』

「っ…！」

見え透いた嘘を言われ、完二が土手の方に振り向いた…。

その隙を突いて、ウラタロス憑依の自分が逃げ出した…。

「いねぇ…、うわ！！また、逃げやがったな！！」

完二が追っ掛けてきた…。

全力で、ウラタロス憑依の自分は逃げた…。

一体、この二人になにがあったのだろうか…。

再び、千枝と砂状態のキンタロスの居る川原…。

「…」

「…」

千枝とキンタロスは黙っている。

すると、千枝は息を吐いて、ベンチに座り直した…。

「ごめん…、カッとなっちゃった…」

「気にしてへん…」

キンタロスは砂状態のまま、ベンチに座った。

「そういや、前も、こんなことがあったっけな…」

千枝は、雪子を守らなきゃいけないと焦っていることや、以前、幼なじみの男子が恐喝グループに襲われていたときの調子に乗った自分の行いことを話した。

「とにかく、強くならなきゃ…、強くなって、みんなを守らなきゃって…、そう思うとさ…、なんか焦っちゃって…」

千枝は自分の悩みを、キンタロスに話している。

「せやけど、十分、お前は強いと思うで…」

「そりゃあ、まぁ、多少は毎日…、特訓してるし…」

「ちゃうねん…！なんというか…、まぁ…、そないな強さのことやなく…、なんというのか…、こう…、心というか、なんというか…」

キンタロスは頭を悩ませている…。
どうやら、上手い言葉が見つからないらしい…。

「あー、それに、雪子はんも、千枝の字が思ってる以上に弱くはあらへん！立派な大和撫子や！」

その言葉に、千枝は笑った。

「んっ、今の笑うとこか？」
「ごっ、ごめん…。その言葉、前にうちのリーダーから言われてね、ハハハ」
「なに、あの頭も、雪子はんを大和撫子とか言うてたのか？さすが、色男やで」
「それは言ってない、ハハハ」

千枝とキンタロスは声を出して、笑い合っている。

「とにかく、亀の字にみたいに上手いこと言えへんけどな…、千枝の字は、千枝の字らしい強さがあるんやから、焦ることない」
「あたしらしい強さ…？」
「うん、そや！ゆっくり考えてみることや」

キンタロスは強く千枝に言った。

「うん！ありがとね…、キンタロス…。今度、よく考えてみる」

千枝は強くキンタロスに頷いた。
また川原に雨が降ってきたので、千枝、キンタロスは真っ直ぐに家に帰って行った。

夜

おいかけっこをやめて、自宅に到着した…。
ウラタロスが自分の身体から抜けると、激しい疲労が肉体を蝕んでいる…。
明らかに、千枝とキンタロスの特訓と、ウラタロスと完二のおいかけっこのせいだ…。

「あっ、お帰り！」

菜々子が出迎えてくれた…。

「そういや、今日、お父さん、まだ帰ってこないね…」

菜々子は心配そうだ…。
実は言うと、自分もかなり心配だ…。

八十稲葉警察署…。

『お前、お茶…』

ジーク堂島が署長の机に腰を掛け、優雅に寛いでいる。

「今日の堂島さん、おかしいっすよ！」
「ていうか、人使いの荒さ、いつもに以上に荒いっすよ！！」

今日も、頭痛薬を飲まねばならないようだ…。

２０１２年２月３日（金）　「悲しみを繰り返し、僕らはどこへ行くのだろう…。

２０１２年２月３日（金）
タロウズ達と出会ってから、６日目…。
雨が降って続いている…。
どうやら、雨は明日まで降り続くようだ…。恐らく霧は出るであろう…。

放課後

明日、霧が出るらしいので、作戦会議をするため、ジュネスへ向かうことにした。
ちなみに、まだ堂島は家に帰って来ない…。

ジュネス食品売場…。
そこでは、モモが憑依した陽介と、ウラが憑依したクマが売り込みをしている…。

『奥さん…、綺麗だね…。とても子持ちには見えないけど…、どうかな…？今日は、奮発してくれない？僕のため…』

ウラクマが主婦の手を握って、高めのステーキ肉を薦めている…。

『いいぞ、亀公！その調子で、ジュネスの売り上げに貢献しやがれ！！』

モモ陽介は楽しそうだ…。
そして、モモ陽介も売り上げに貢献しようと、一人のダンディー

風のワイルドな男を捕まえた。

『よっ！兄さん、今日は、奮発してかない！？』

ワイルドな男は振り向いた…。

「なんだ、こいつは…？」

「どうしたの？次狼？」

「ん…」

すると、ワイルドな男の周りに、小柄な少年と、筋肉質な男が現れた…。

ワイルドな男は、次狼という名前らしい…。

『とりあえず、試食してみてくれ、試食！』

モモ陽介は、試食品のステーキ肉を次狼達に渡した…。

「んっ、なかなか…」

「うん！美味しいね！次狼！」

『だろだろ！』

小柄な少年は、三つステーキ肉のパックを手に取った。

「ラモン…、今日は、ステーキにする気か？」

「うん！たまには奮発しようよ！」

小柄な少年はラモンという名前らしい…。

『まいどありー！』

売り上げに貢献出来て、モモ陽介は、はしゃいでいる…。
次狼達が会計に向かおうとして居ると…。

「あれ、次狼？力が居ないよ…」

ラモンが居なくなった仲間を探している…。
どうやら、さっきの無口な男は力と言うらしい…。
すると…。

『うわぁ！！』

モモ陽介が叫んでいる。

「いただき…、もす！！」

なんと、力という男性はホットプレートごと、試食品のステーキ肉を食べようとしている！

「うわ！なにをやっている！！」
「だっ、ダメだよ！力！！」
『勝手に、そんなに食うな！バカヤロウ！！』

力という男性を、次狼、ラモン、モモ陽介が必死に抑えている…。
再び、視線をウラクマに変えた…。

『そこのお兄さん？どう？ステーキにしない…』

ウラクマは、妙な皮のコートを着た二人組の男を捕まえた。片腕だけ、破れたコートを着ている…。

なんというか、見れば見るほど、こっちが暗くなってしまうような負のオーラが漂っている…。

「兄貴…、ステーキだって…。いいなぁ…、ステーキ…」
「相棒…。やめろ…、ステーキなんて…、今の俺には眩しすぎる…」
『えっ、なっ、なに言ってるの？』

兄貴というからには、兄弟のようだが…。
さすがに、ウラクマが焦っている…。
この訳解らない会話から、あの兄弟を『地獄兄弟（仮）』と呼ぶことにした…。

「兄貴…、すげぇ…。ジュネスって、なんでも揃ってるよ…」

顔に傷のある弟の方は、食品売場を見て喜んでいる…。
すると…、兄貴の方が、そんな弟の目を伏せた…。

「やめろ…。ジュネスを誉めるな…」
「なんでだよ…、兄貴…。ジュネス、すごいじゃないか…」
「ジュネスを誉めれば、誉めるほど、俺達が惨めに思えるだろ…」
「そっ、そうだね…、兄貴…」
「どうせ、俺達みたいなろくでなしはジュネスみたいにはなれないのさ…」
『えっ、あのお客さん…』

ウラクマが、今まで見せたことのない余裕のない表情を浮かべた…。
すると、ウラクマは空気を変えようと…。
『お兄さん方、とりあえず、ステーキの試食してみない？』

ウラクマは試食のステーキを地獄兄弟（仮）に勧めた。

「えっ…？いいの…、すげぇ、やっぱり、ジュネスはすげぇよ…」

弟が喜んで、試食のステーキ肉を取ろうとしていると…。

バチン！！

兄貴が弟の手を叩いた。

「なにすんだよ！兄貴！！」

さすがに、弟がキレた…。

「バカヤロウ…、俺達みたいなろくでなしがステーキなんか食べていいわけないだろ…」

『いや、試食品ですから、いいですよ…』

ウラクマを無視して、兄貴は弟の襟首を掴んだ…。

「いいか、相棒…。前にも言ったが、俺達みたいなろくでなしが光を求めるとな…」

「兄貴だって！！兄貴だって！！昔は、ステーキに憧れていたんだろ！！」

「解ってないな…、相棒…」

そう言って、兄貴はコートを脱いだ。

！？

なんと、兄貴のコートの下は身体中が鎖で縛られている！！
弟が驚いている。
当然、近くに居るウラクマや、他の客も…。

「あっ、兄貴！これは！？」
「俺は…、天道に豆腐対決をすっぽかされた日から、豆腐以外は食べないように、俺は俺自身に罰を与えた…。さらなる深い闇を見るためにな…」

なにを言っているか、まったく解らない…。
すると、弟の方が泣き始めた。

「兄貴、カッコいい…！兄貴！カッコよすぎるよ！！」

ウラクマが頭を抱えている…。

「やめろ！ドッガ！」
「やばいよ！正体を現しちゃったよ！」
「うがー！」
『てめえら、出ていけー！！』

モモ陽介も大変なようだ…。

頭痛がしたので、フードコートで頭痛薬を飲むことにした…。

フードコートへ向かう途中…、キンタロスに憑依された完二がゲームコーナーのパンチングマシーンの前に立っている。

（よし、今日なら新記録が出せそうだぜ！頼んだぜ！キンタ！！）

『むっ、任せとき！！』

そう言って、キン完二はパンチングマシーンに向かって、パンチをした…。

バゴーーーン！！

物凄い衝撃音がした…。

（うわぁ！力入れすぎだ！バカ！）

結末は解るので、そのまま、フードコートに向かった…。

屋上、フードコート…。

雨が降っている…。

テントの下では、リュウタが憑依した千枝と雪子、りせ、直斗がお絵描きをして遊んでいる…。

「普通に会うのは、久しぶりですね…、先輩…」

湿布だらけの直斗が挨拶をした…。

『あーっ、先輩ー！先輩ー！』

リュウタ千枝が無邪気に笑っている。

「どうかしたの？」

と雪子が聞いてきた…。
作戦会議をしたいんだが…、と言った。
しかし、メンバー全員での作戦会議は無理だと判断した。
「しょうがない…、僕達だけで…」
『アハハ！直斗、偉そうー！偉そうー！』
リュウタ千枝に頭をガシガシされながら、直斗がため息をついた…。
「じゃあ、リュウタ君、私たちは、またお絵描きして遊ぼうー」
『うん！やったー！』
リュウタ千枝の相手を、雪子に任せた…。
筋肉痛の全身を痛ませながら、直斗はリュウタ千枝を睨んでいる…。
「で、先輩…、さっきもサーチに行ってきたんだけど…」
りせが話を切り出した…。
「やっぱり、霧の影響でさっぱりだった…。でも、かなり強い気配がある…。しかも、日に日に強くなってるみたい…」
「それが、例のイマジンとかいう存在ですかね…」
直斗がそう言ったので、頷いた。
すると、りせが不安げに…。
「あと、なんか変なのよ…。テレビの中で感じる、変な気配は…、

なんか一つだけじゃないみたい？」
「一つだけじゃない？大勢居るってことですか？」
「違うの…、リュウタ君達をここに来た原因らしき気配は、こないだまで、確かに一つだけだったのに…、今日、２つぐらいに感じた…。ごめん、よく解らない…」

りせ、直斗が頭を悩ませている…。
そういえば、明日は、霧が出る…。今日は、タロウズ達をテレビに住ませておくのは危険だと話した。
「それについては、案があります…」

直斗が手を挙げた。
「不本意な案ですがね…」

直斗は無邪気に笑っているリュウタ千枝を見つめた…。
「彼ら、リュウタ君達はテレビの中では実体を持ち、霧が出る日にシャドウの暴走に巻き込まる場合がある…。なら、シャドウの暴走が治まるまで、こちらの現実世界に置いておく…。つまり、リュウタ君達を今日一日、テレビの中ではなく誰かしらの身体に憑依させてやり過ごしましょう…」

直斗から、霧が出る今日は、タロウズ達をテレビから出して、シャドウ達の暴走からやり過ごすとの案が出た…。
「それに、こっちで霧が出たあと、テレビの中に居る気配について、なにか解るのでは…」
「直斗君、あったまいいー！」

りせが直斗を誉めた。

『直斗、あったまいいー！』

リュウタ千枝も、直斗の頭を撫でた。

「やっ、やめないか！リュウタ君！」

直斗はリュウタ千枝のいたずらを嫌がっている…。

「あたしも、直斗君の案に賛成かな。それで、明日は改めて、テレビの中に行って、問題のイマジンっていうのを探しましょう」

雪子はリュウタ千枝の頭を撫でながら、直斗の案に賛成した…。

リュウタ千枝はねんごろになり、雪子にじゃれている…。

「あたしも賛成！」

りせは楽しそうに手を挙げた。

とりあえず、今日一日は、タロウズ達を現実に置いて過ごすことにした。

あとで、みんなに連絡をしておこう…。

すると…、雪子が…。

「あっ、そうだ？明日、学校は校長先生の上京記念日でお休みだし、リュウタ君、今日、うちの旅館泊まってかない？それに、みんなも！」

『えっ！？本当に！』

！？

脳裏に、あの日の悲劇が蘇った…。

リュウタ千枝は喜んでいる…。

「ちょっと！天城先輩！」

「賛成ー！！」

直斗は嫌がっている…。

りせは楽しそうだ。

「天城先輩！危険です！忘れたんのですか、あの日の…」

「あなたは、どう思う？」

雪子が自分に意見を求めた…。

自宅でのジークの経験から、バラバラにタロウズ達をみんなに憑依させておくのは、いろいろ危険かもしれない…。

なら、みんなとまとまって今日を過ごした方が無難かもしれない…。

しかし、リスクはあるが…。

仕方なく、雪子の旅館に、メンバー全員とタロウズ達で泊まることにした…。

一応、自宅に電話することにした…。

菜々子も連れていこう…。

「あっ、お兄ちゃん！」

電話には、菜々子が出た。

「お父さんが帰ってきたよ！」

どうやら、ジーク憑依の堂島が帰ってきたようだ…。

「お父さん、いっぱい菜々子のためにオモチャとかゲーム買ってきてくれたよ！今日は夜ふかしＯＫで、明日の朝まで遊んでくれるって！！」

その金は、どこから…。

かなりの冷や汗が出てきた…。

どうやら、ジークと菜々子は、それなりに上手く行っているようだ…。下手にジークを連れていけば、更に状況は最悪になるかもしれない…。

なにより、ジークが入れは、少なくとも菜々子は無事だろうと思った…。

菜々子、ジーク堂島に旅館のことは告げず、陽介の家に泊まると、言っておいた…。

しかし、旅館では、どうなることやら…。

嫌な予感で、頭痛と胃痛がした…。

天城屋旅館の夜　「絶対自分だけがこの時代を変えて行ける」

夜、雨

自称捜査隊、タロウズ達と天城屋旅館に泊まることになった…。
男性陣は苦い顔をしていたが、タロウズ達はとても喜んでいる…。

天城屋旅館の室内温泉、男湯…。

モモは自分、ウラは陽介、キンは完二、リュウタはクマに憑依して、温泉に入っている…。
自分達以外に、誰も居ないようだ…。

『ふぅー、いい湯だぜ』

モモが憑依した自分が、ゆったりと湯に浸かる。

『なんだ…、混浴じゃないのか…。しかも、女の子達の誰一人にも憑けなかったし…』

ウラ陽介が、残念そうにしている。
メガネが湯気で曇っている…。外せよと思った…。

『ぐがー、ぐがー』

キン完二は眠っている。

『なんで、お姉ちゃん達とじゃないの！？』

リュウタクマが怒っている。

『うるせぇー、バーロー！静かにしやがれ、ハナタレ小僧…』

モモが憑依した自分が、リュウタクマをなだめる。

リュウタクマがむくれた。

『うるさい！モモタロスのくせに！！』

リュウタクマがバシャバシャ！と湯の中で暴れた。

『もういい！お姉ちゃんのとこ行く！！』

『うわっ、ダメだよ！リュウタ！』

とうとう我慢出来なくなったリュウタは立ち上がって、女湯に向かおうとして居る。

モモが憑依した自分と、ウラ陽介が必死にリュウタをなだめた。

『うわっ！バカ！落ち着け、ハナタレ！』

すると…。

ガラッ！

戸が開いた。

旅館の客と思える男が、ケロリンとヒヨコを持ち、腰には『753』と描かれたタオルをし、頭にはシャンプーハットをして温泉に現れた…。

『うわっ、リュウタ！他のお客さんに迷惑だよ！！』

ウラ陽介は、リュウタクマをなんとか落ち着かせた。
「君たち…、温泉では静かにしなさい…」
７５３タオルの男が、我々に注意した…。
『すっ、すんません…』
『この子、温泉初めてで、はしゃいでいるんです…』
モモが憑依した自分と、ウラ陽介が謝った。
「今度から、気を付けなさい…」
７５３タオルの男は、身体を洗い始めた…。
『…態度のでかい奴だな…、おい…』
モモ自分が、ボソッと７５３タオルの男の陰口を言った。
すると…。
「君たち！」
『ひっ！』
シャンプーをしている７５３男が、いきなり振り向いた。
「温泉では静かにしろと言ったはずだ…」
『えっ、今の聞こえてた…』
「私に、二度同じことを言わせるな…。いいな…」
７５３は凄い形相でタロウズ憑依の自分達を睨んでいる…。

（こっ、こえー、なんだよ、あいつ…）
（せっ、先輩…。関わんない方良さそうだよ…）
（なに、あの人ー、ヤクザ！ヤクザ！？）

テレパシー状態で、モモとウラ、リュウタが会話をしている…。
すると…、７５３は持っていた石けんを落とした。
石けんは自分の方に滑ってきた…。

「君たち！」
『ひっ！』
「その石けん…、私に返しなさい…」
『自分で拾えよ…』

モモ自分が、そう言った。
すると…。

！？

７５３タオルで、前を隠しながら、男は立ち上がった。

「君達…、私を誰だと思っている！」

７５３は凄い怒っている！

『じゃあ、誰だよ！！』

モモ自分が名前を聞いた…。

「私は…、名護だ…」

『いや、だから、誰だよ…』

753タオルの男は、名護さんと言う名前らしい…。

かなり名護さんは、機嫌を損ねている…。

「まったく…、最近の高校生は…、礼儀を知らないのか…」

身体を洗い流すと、名護さんも湯に入った…。

かなり険悪なムードになった。モモ自分、ウラ陽介が黙り込んだ…。

すると、リュウタクマが…。

『いやっほーい!!』

!?

なんと、温泉で泳ぎ始めた。

バシャバシャ!と温泉の飛沫が、名護さんの顔にかかっている。

『うわ!バカ!ハナタレ!やめろ!!』

『リュウタ!やめなってば!!』

モモ自分と、ウラ陽介がリュウタクマを抑えた…。

だが、名護さんの堪忍袋の緒はキレた…。

「君達…」

名護さんは湯船から出て、ケロリンからなにかを取出し、手に握った…。

『やばい!先輩!凄い、怒っている!』

『おい！ハナタレ！謝れ！謝りやがれ！！』

モモ自分が、リュウタクマの頭を無理矢理下げさせた…。
だが、リュウタクマは、どこからか持ってきた威力の高い水鉄砲で、名護さんの顔面にお湯を放った。

バッシャー！

名護さんは、フルチャージでキレた…。

「君達！その命…、神に返しなさい！！」

名護さんは、持っていたなにかを手のひらに当てた。

ラ、イ、ジ、ン、グー、との電子音が流れた。

「変身！」

名護さんは持っていたナックルを腰に巻いたベルトに装着させると、鎧のような姿のライダースーツに変身した。

『ぎゃあああ！！！』

モモ自分が叫んだ。
変身した名護さんは、湯船に浸かる自分に殴りかかろうとしている！
だが…。

つるっ…！

名護さんは、さっき自分が落とした石けんで足を滑らせた…。
「ぐぁ！」
ドッガ！！と名護さんは、豪快に倒れた。
「…」
名護さんは、ピクリ…とも動かなくなった…。
どうやら、気絶したようだ…。
『…』
『…』
モモ自分とウラ陽介が言葉を失った…。
すると…。
「ちょっと！男湯うるさい！！」
壁越しに、女湯に居る千枝の声が聞こえた…。
「静かにして、他のお客さんに迷惑だから…」
雪子の声もした。
リュウタクマは喜んだ。
『あーっ！お姉ちゃんだ！！』
『ん？どうした、モモの字、亀の字…』
さっきの音で目を覚ましたキン完二が、モモ自分、ウラ陽介にな

にが起きたか聞いた…。
すると、モモ自分、ウラ陽介が口を揃えた…。
『『名護さんは最高です…！』』
名護さんは、湯船に死体のように浮かんでいる…。

名護さんを放置して、浴衣に着替え、全員が男湯から退却した…。
モモ、ウラにトラウマが芽生えつつ、部屋に戻ることにした。
しばらくして、千枝、雪子、りせ、直斗達も女湯から上がり浴衣になっていた。

「いやーっ、やっぱり、雪子んちの温泉は最高だね！」
「ええ…、筋肉痛がとれましたよ」
と直斗が言っていると…。
紫色の光が出てきた。
それに直斗は気付いた。
「里中先輩！危ない！」
紫色の光が千枝に飛び掛かってきたので、直斗が身代わりなった…。
すると…。
『へっへーん、やっぱり、直斗君の方が動きやすいや！』

どうやら、直斗はまたリュウタに支配されたようだ…。
直斗は浴衣姿に帽子を被って、その場でブレイクダンスを踊る…。
「直斗、また筋肉痛だね…」
りせが、そう言った。
すると…。
「困ります！！」
「いいじゃないですか？宣伝を兼ねた取材なんですから」
なにやら、玄関で揉め事が生じている…。
雪子の顔がハッ！とした。
「まさか…」
千枝、雪子、りせ、リュウタ直斗が玄関に向かうと、テレビ局のプロデューサーやアシスタントのマスコミの姿が…。
例の事件を弱味に、また取材といいつつ、悪質な番組の企画を持ち上げて来ている…。
「おっ、噂をすれば、女子高生女将じゃないですか！？」
「雪ちゃん、逃げなさい！」
中居さんを避けてマスコミ陣は、雪子を見つけると、いやらしい笑顔を浮かべて迫ってきた…。
『なに、こいつら？殺ってもいい？』
リュウタ直斗は戦闘態勢になった。

「ちょっ、リュウタ君は落ち着きなさい！！」

りせが、リュウタ直斗を押さえ付けた。

「こっ、こいつらぁ…、また、雪子んちに迷惑を…」

千枝は怒っている。

「いやぁ、もう一度、あの企画を考えてくれないか？女子高生女将さん…」

「もうあなた方と話すことはありません…」

雪子は丁重に断った。

しかし、当然、すんなり立ち去る相手ではない…。

「本当に、美味い話にはのらない貧乏旅館だな…」

すると、雪子に赤い光が入ってきた…。

ハッ！と雪子の瞳は赤くなり、髪には赤いメッシュが入った…。

雪子にモモが憑依した。

『話すことはねぇ！っつてんだろ！！タコ共！！名護さんと一緒の入浴シーンにさせんぞ！コラ！！』

モモ雪子は、プロデューサーの襟首を乱暴に握り持ち上げた。

「うわあああああ！ぼっ、暴力反対！！」

プロデューサーは、かなりビビっている。

中居さん方も、ビックリしている。

「ちょっ、モモ君！！」

千枝がビックリしていると、今度は、千枝に青い光が…。
ウラに憑依された千枝は眼鏡を掛けた…。

『まったく、先輩は…。短気なんだから…』

そう言って、モモ雪子の手から、プロデューサーを離してやった。

『邪魔すんな！亀公！』
『はいはい、先輩は黙ってて…』

モモ雪子を抑えながら、ウラ千枝はマスコミを相手にした。

「なんなんだね！この旅館は！こんな暴力女子高生女将だったとはな！」
『まぁまぁ、落ち着いて…』

ウラ千枝は、プロデューサーの顎を優しく触った…。
どうやら、色仕掛けをしている…。

『天城雪子さんのマネージャーを務めさせていただきます…、浦島千枝です…。この旅館を撮るという話…、解りました…。お受けしましょう』

！？

なんと、ウラ千枝は勝手にマスコミの話を承諾してしまった。

『なっ！バカか！亀！！』

モモ雪子が、ウラ千枝に怒り狂った。

「ほうほう…、君は話が分かるようだね…」

マスコミ陣は喜んでいる…。

『はい…。しかし、玄関では他のお客様のご迷惑になります…。それに、今満席なので、すみませんが、外で話し合いましょう…』

と言って、ウラ千枝がマスコミ陣を連れて、外に出た…。

すると…。

『キンちゃん…、あと、よろしくー』

ウラが出て行くと、千枝にキンタロスが憑依した。

『任せとき…！』

キン千枝は首を鳴らして、プロデューサーの胸ぐらを掴み、単純な腕力だけで投げ飛ばした。

「ぎゃあああああーーーー！！！！」

プロデューサーは、かなり遠くに飛んで行った…。

「やったー！ナイス！キンちゃん！」

この光景を見ていたモモ雪子、りせ、リュウタ直斗、中居さん方

は喜んでいる。
しかし、まだ面倒事は尽きなかった…。
プロデューサーが連れたマスコミの二人が玄関に戻ってきた。
「ちっ、ちくしょう！お前たち！こんな真似して済むと思っているのか！？」
「口約束とはいえ、契約したってことにしてやるからな！！入浴シーンだけじゃなくしてやるからな！！」
逆上したマスコミ陣は、とうとう本性を表した。
『ああん！？おめぇらこそ、入浴シーンじゃなくて川ボチャシーンにしてやんぞ！！てめー、こら！！』
モモ雪子が喧嘩腰にマスコミに殴りかかろうとしているのを、中居さん方が必死に止めた。
「雪ちゃん、落ち着いて！今、怒ったりしたら、相手の思うツボよ！！」
外に居たキン千枝は焦っている。
『やっ、ヤバイ状況やで！亀の字！』
リュウタ直斗は拳銃を構えている…。
「そっ、それは一番、マズイってリュウタ君！！」
りせが必死に直斗を止めている。
最悪の状況だ…。

すると…。

「お婆ちゃんが言っていた…」

!?

浴衣姿の美青年が居間から出て、玄関に現れた…。

すると、沸騰していたような現場が静まった。

「調理場に入った蝿は全力で始末しろ…。でなければ、神聖な場所が汚れると…」

男は、そう言った…。

『だっ、誰だ?あんた…?』

モモ雪子が名前を訊ねた。

男は人差し指を立てた…。

「天の道を往き、総てを司る者…」

マスコミを睨んで、男は手をかざした。

「更に、お婆ちゃんが言っていた…。慌てて飲み込んではいけないものがある…。正月の餅と、真実をねじ曲げるマスコミの情報と…」

すると、かざした手にはカブトムシの形をしたなにかが現れた…。

「変身！キャストオフ！！」

男は、カブトムシの形をしたなにかをベルトにはめるとライダースーツの姿に変身した。

『チェンジ、ビートル！』

電子音が鳴り響いた。

さらに、カブトムシのライダースーツは、手にまたカブトムシの形をしたなにかを握り締め、これもベルトに着けた。

『ハイパーキャストオフ！！チェンジ！ハイパービートル！！！』

カブトムシのライダースーツは、更に進化した。

そして、ベルトに触れた。

「ハイパークロックアップ！」

『ハイパークロックアップ！！』

ギュン！！

なんと、カブトムシのライダースーツ以外の時間すべてが巻き戻っている！

しばらくすると、玄関にマスコミ陣が現れたところまで、時間が巻き戻った。

そして、マスコミ陣に目にも止まらない早さで1人ずつ、額にデコピンをして気絶させた…。

カブトムシのライダースーツは、気絶したマスコミ陣を山のどこかへ放り投げ、また旅館へと戻った。

『ハイパークロックオーバー！』

ベルトからカブトムシが外れると、男は元に戻った…。
「やれやれ…、料理が冷めないうちに戻って来れたか…」
そう言って、男は自室に帰って行った…。
時間の流れは変わり、千枝、雪子、りせ、直斗が浴衣姿で女湯から出てきた…。

「いやーっ、やっぱり、雪子んちの温泉は最高だね！」
「ええ…、筋肉痛がとれましたよ」
と直斗が言っていると…。
紫色の光が直斗に飛び掛かった。
すると…。

『へっへーん、やっぱり、直斗君の方が動きやすいや！』
どうやら、直斗はまたリュウタに支配されたようだ…。
直斗は浴衣姿に帽子を被って、その場でブレイクダンスを踊る…。
「直斗、また筋肉痛だね…」
りせが、そう言った。
こうして、千枝達はマスコミ陣に会うことなく居間に戻った。

天城屋旅館の夜２　『信じる奴がジャスティス！』

天城屋旅館　宴会部屋

特別に、雪子が宴会場を貸してくれた。
自称捜査隊、タロウズ達は大ハシャギだ。
ここには、カラオケがあったので、みんなで歌うことにした。
「キラッ☆流星に乗ったーかってー、あなたに急上昇ー！！イエーイ！！」
りせがノリノリで歌っている。
みんな、楽しそうに盛り上がっている。
『いいぞー！りせちー！！いいぞー！』
モモ陽介が叫んでいる。
りせが自分に向かって、手を振っている…。
適当に、手を振ってやった…。
「きゃーっ！先輩！抱き締めて！銀河のはちぇまぇー」
歌っている途中で、いきなりりせが自分に抱きついてきた。
！？
みんな、驚いている。
「ちょっ、ちょっとりせちゃん！！」

雪子が取り乱している…。
なにをするだぁー!?と、りせから離れた…。
「せっ、せんぷぁい…、なっ、なんらか…、身体が熱いの…」
りせの様子が変だ…。
顔が赤い…。
『どっ、どうしたの?りせちゃん…、ろれつ回ってないよ…』
ウラ完二が焦っている。
すると…。
『イエーイ!ブルーレイディスコ!ブルーレイディスコ!』
今後は、モモ陽介が勝手に盛り上がって、踊り始めている…。
やはり、顔が赤い…。
『うわっ!先輩もなにやってんの!?』
ウラ完二は暴走したモモ陽介を抑えに行った。
『なにをするんだ!スケベ亀君!僕は一生懸命、踊っているのだよ!!』
モモ陽介の様子が明らかにおかしい…。
『へへっ、イエーイ!ブルーレイディスコ!ブルーレイディスコ!いいーじゃん!いいーじゃん!すげーじゃん!』

今後は、リュウタ直斗が、モモ陽介のリズムに合わせて、ブレイクダンスを始めた。

『リュウタも、なにやってんの！？』

ウラ完二は、リュウタ直斗を止めた。

『うっ、うるさい！うるさいなぁ！亀ちゃんのくせに！！ぼかぁ、リュウタロスらぞ！』

リュウタ直斗の顔が赤い上、やはり、ろれつが回っていない…。

『ちょっと、キンちゃんも黙ってないで！』

ウラ完二がキンタロスが憑依したクマに手伝いを求めた…。

しかし、キンクマは大の字で眠っている…。

しかも、顔が赤い…。

千枝、雪子、ウラ完二の顔は青ざめている…。

モモ陽介、キンクマ、リュウタ直斗、りせの様子は明らかにおかしい…。

「こっ、これって、まさか…」

千枝が頭を抱えた…。

「違う！さっきの料理でお酒なんて、出してないからね！」

雪子は焦っている。

「いや…、わかってるから…。そうか…、雪子は修学旅行のときは、あっち側だったからね…」
「へっ？」

雪子は、なんのことだか解らないでいる…。
自分の脳裏に、修学旅行での悪夢が甦る…。

「だけど、モモ君、キンタロス、リュウタ君の場合、場酔いなんてするかな？」

千枝は頭を抱えた…。
すると、ウラ完二はハッ！とした。

『雪子ちゃん、さっきの料理に、ワサビとかカラシとか、とにかく辛いものが入ってなかった？』
「えっ、入ってたと思うけど？」

雪子がそう答えると、ウラ完二は頭を抱えた…。
どうやら、タロウズ達は辛いものを食べると、身体に異常を来すらしい…。
そして、りせは、ただの場酔い…。
今回、雪子が無事なのは、免疫がついたか、自宅の空気だからだろう…。

「てことは、このパターンやばくない！！」

千枝は立ち上がり、雪子を連れて逃げようとしたが…。
もう遅かった。

「王様ゲーム！！クライマックスバージョン！！」

りせが大声で叫んだ。
モモ陽介、リュウタ直斗が大盛り上がりで拍手した。
『いいぞ！りせ君！！』
『イエーイ！りせちゃん！ナウいー！！』
千枝、雪子は顔が青くなっている…。
「ヤバイ！やっぱり、このパターンか…」
「ちっ、千枝！王様ゲームってなによ！！」
だが、ウラ完二は普通に楽しそうだ…。
『えっ、でも、普通に楽しそうじゃない？』
「あんたは、うちらの王様ゲームの内容を知らないから、そんなことが言える…」
千枝はげんなりした…。
「完二！割り箸用意！！」
『へっ、なんで僕が？』
「いいから、持ってこぉーい！スケベ亀！！」
『ひっ！』
りせの勢いに押され、完二は割り箸を取りに、居間から出て行った…。
…。
手伝うことにして、自分もウラ完二について行った…。

「ちょっ、あたし達に、この場酔い軍団を押しつけないでよ！」
千枝は悲鳴のような叫びをしたが、聞かなかったことにした…。
雪子は、リュウタ直斗に絡まれている…。

『まったく…、なんで僕が割り箸準備なんて…』
…。
割り箸を取りに行くついでに、以前から、完二がウラタロスに騙された！騙された！と叫んでいるので、聞いてみることにした…。
『えっ、それはだね…』
ウラ完二が喋ろうとしたとき…。
「バカ！喋んじゃねぇ！！」
完二は身体からウラタロスを追い出して、元に戻った。
そして、追い出された勢いで、ウラタロスは自分に憑依した…。
眼鏡を直しながら、ウラ自分は…。
『別に話したっていいじゃない…』
「良くねぇんだよ！！先輩の身体じゃなかったら、ぶん殴ってんぞ、てめえ！！」
完二は顔を赤くしている…。
すると、ウラ自分が、ハハハ笑いをした。

『別にいいじゃない…。男の子が、女の子から好かれようと努力するのは格好悪いことじゃないよ』
「だっ、だけどよ…」

どうやら、完二はモテようか、女の子から好かれようとして、なにかで騙されたらしい…。
いや、もしかすると、特定の誰かに好かれようとして…。

「やっぱり、他人から好かれようとして、自分にも、他人にも嘘つくのは良くねぇよ…。だから失敗しちまったし…」

完二は苦い顔をした…。

『そう?所詮、この世は万の偽り、千の嘘…、嘘ついて楽しく生きた方が得だし…』
「てめえ!!だから、違うってんだよ!」

完二は声を荒げた。
すると…、ウラ自分は…。

『でも、完二みたいに…、自分に正直なのを格好悪いとは思わないよ…』

完二は黙った。

『まぁ…、僕は嘘ついてなんぼだけど…。それでも、認めてくれたバカ正直な良太郎が居たから、こうしてられることだし…。大切なのは、どんな自分でも認めてくれる人と、どんな自分でも認められる自分が必要なんないかな?』
「…」

完二はなにかを考えている…。

『まぁ、僕は完二が好きだよ…』

「うっ、うるせぇな…。俺はそっちの趣味はねぇかんな…」

完二は赤くなった。

『やっぱ、騙し甲斐のある方が話してて楽しいし…』

「っあ！この亀野郎！！」

完二がウラ自分の首をわしづかんだ…。

苦しい…。

完二に首を絞められながら、割り箸の準備をした。

宴会場へ戻るついでに、窓から外を眺めてみた…。

雨はまだ降り続いている…。少しだけ、霧も出始めている…。

…。

気のせいなのか、ただの考えすぎか、この霧…。

あの時の霧と…。

脳裏に嫌な記憶が甦る…。

すると…。

「いやな…、予感がする…」

！

隣で一緒に、外を眺めていたブルゾンを着た青年が、自分と同じことを言っている…。

ブルゾンの青年は、わなわな…、と外の雨を睨んでいる…。

「この霧…、まさか…。ゴルゴムの仕業か！？」

ブルゾンの青年は、そう叫んだ。

なんだ？ゴルゴムって…？

「先輩ー！早くしろー！！」

宴会場から、りせに叫ばれたので、急いで戻ることにした。

ブルゾンの若者は、外を睨みながら…。

「信彦…！」

と呟いた。

天城屋旅館の夜３　『大事な言葉とか、かけがえない思い出を集めて』

「王様ゲーム、パート２！」

と、りせが叫んだ。
また、悪夢の時間が始まった…。
モモ陽介、リュウタ直斗が手を叩いて騒ぐ。
千枝、雪子はげんなりしたまま拍手をする…。
ウラ完二は、なにか考えている…。
たぶん、ろくでもないことだ…。賭けてもいい。

「はいはい！引いた！引いた！！」

りせが無理矢理にみんなにくじを引かせた。
千枝、雪子は恐る恐る引き、自分も恐る恐る引いた。
引いたくじには、『２』と書かれている…。
なにも起きなければいいが…。

「王様ー、誰だ！？」

りせが叫んだ。

ウラ完二が、手を挙げた…。

「うわっ…」

千枝、雪子が物凄い嫌な顔をした。

『いやー、初っぱなから、ついてるねぇー』

ウラ完二は、すごく嬉しそうだ…。

「ウラ君…、信じてるからね…」

千枝は、ボソッとウラ完二に告げた。

すると、ウラ完二は…。

『3番が、王様にチッス！』

！！

「ええっ！？」

雪子が唖然となった。

千枝は、悪夢の再来だと…、笑った…。

すると、ウラ完二は笑った。

『ははは…、王様の命令は絶対尊主だよ…、君たち…。いやぁ、ここに来てから、ろくなことなかったけど…、とうとう僕の天下かな…』

（ばっ、バカヤロウ！てめ！このスケベ亀！！）

ウラ完二の中で、完二が物凄い焦っている。
『さぁ！3番だれ？』

モモ陽介が手を挙げた…。
『ごめん…、今のなし…』
ウラ完二は血が引けた…。
すると、りせが怒って立ち上がった。
「ダメらよ！王様の命令は絶対尊主ってたの、亀らよ！！」
『そうだ！そうだ！！亀ちゃんらよ！！』
リュウタ直斗も責めた…。
千枝はホッとしている…。
「あたしも修学旅行…、あんな感じだったのかな…」

雪子は何故か落ち込み始めた…。
モモ陽介が立ち上がって、ウラ完二に近づいた。

『スケベ亀君…』
（うわー！！やめろ！モモタロス！俺の体で、それはやめろ！！）

モモ陽介が目を煌めかせて、ウラ完二に近寄る…。
陽介本人は、物凄く拒否している…。

『やっ、やめて…、先輩…、マジで…、やめて…、お願い…。しかも、乙女の目で見ないで…、せめて、女の子に憑いてからにして…』
（またかよ…）

ウラ完二は本気で泣きそうだ…。
物凄い力で腕を掴み、モモ陽介はウラ完二を押し倒した…。

『スケベ亀君に…、捧げてもいいかな…、この純潔…。モモタロス』
『いやぁあああああああ！！！！』

モモ陽介の唇が、ウラ完二の唇に迫った…。
その時！

「君たち！静かにしなさい！まったく、騒がしい旅館だ！！」

名護さんが現れた。
一気に、モモ陽介、ウラ完二の目が醒めた。

『うわあああああ！！！！名護さんだあああ！！最高な人、名護さんだあああああ！！！』
『うわあああああああ！！！！助かったけど、うわあああああああ！！！！名護さんだあああああ！！！』

正気に戻ったモモ陽介、ウラ完二は、急展開に立ち上がり、即効で部屋から出て行った。
この場に便乗して、近くに居た雪子の手を引っ張って逃げた…。

「あっ、待ってよ！いっ！」

千枝は逃げようとしたが、足が痺れて反応が遅れ逃げるタイミングを失った。

「むっ、キミはあの時の…」

名護さんが、キンタロスが憑いて眠っているクマに気付いた。
そう言えば、クマとは男湯で出会っている…。

『あっ！待ってよ！お姉ちゃん！！』

リュウタが直斗の身体から出ていき、砂状態で、雪子を追い掛けて行った。

「ぐぁ！」

直斗は元に戻った。

「なっ、なによ！みんなして、りせを置いてくの！？もう！なによ、王様ゲームだってのに！！」

王様ゲームをすっぽかされたりせがキレた。
すると、名護さんが王様ゲームに反応した。

「なに、王様ゲーム…？」
「そうよ！王様ゲームよ！！」

りせが名護さんに叫んだ。
千枝がりせを抑えている…。

「ちょっ、りせちゃん！落ち着いて…、すいません…、この子、ちょっと場酔いしちゃって…」

すると、名護さんはなにかブツブツと独り言を話し始めた…。

「王様…。王様とは、すべての下じもの人間を管理する選ばれし者…。まさに私にも相応しい職務…。そういえば、以前も紅渡としたような…」

「あっ、あのー？」

自分の世界に入った名護さんに、千枝が話し掛ける。

すると…。

「面白い！私にもやらせなさい！！」

なんと、名護さんも王様ゲームに参加することになった！？

「え！？」

千枝、直斗の顔が固まった。

「よーし！じゃあ！二回戦目よ！！」

こうして、千枝、りせ、直斗、名護さんのメンバーで王様ゲームが開始された…。

一方、自分は雪子を連れて、人気のない静かな一室に逃げ込んだ…。

とりあえず、そこに座ることにした。

「はぁ…、なんか修学旅行が…、あんな感じだったって考えると…」

雪子は落ち込みながら、ふと自分の顔を見つめた。

すると、なぜか、顔が赤くなった…。

雪子は周囲を見渡している…。

「あっ…、そっ、そういえば…、千枝を置いてきちゃったね…、ハハハ…。にしても、誰かしら、あの名護さんって人…」

相変わらず、自分と一緒だと緊張しやすいようだ…。

「あっ…、えと…」

雪子は顔を赤くして、会話に困っている。

会話が続かず、雪子の緊張のせいでこっちも緊張して妙な雰囲気になっている…。

すると…。

足音が聞こえてきた。

「剣崎ぃ…」

「どうしました、橘さん」

若い男性客2人組の声がした…。

「ここの温泉…、ライダーシステムに効くのか…」

「効きますよ！あと、ライダーシステムの弊害は、橘さんの考えすぎですよ！！」

「お前になにが解る？」

「ウェッ？」

「お前になにがわがるって言うんだぁ！！！」

「いえっ、なにも！！」

「ライダーシステムの弊害で、俺の身体はボロボロだ！！！」

橘とかいう男は泣き叫んでいる…。

「剣崎、お前なんか知らん…」
「待って下さい！橘さん！！」
「ここの旅費全額、お前の負担だ…。いいな…」
「！？待ってください！！旅費は、あんたと俺で割り勘じゃなかったんですか！！橘さん…、オッ、オンドゥルルラギッタンディスカ！！あんたと俺の割り勘じゃなかったんですか！？嘘だぁ…、嘘だ！！ドンドコドーン！！！！」

そう言って、若い男性2人組は立ち去って行った…。
自分の顔が固まっている…。
なにあれ…、お笑い芸人？

「ぷっ、ぷ、くっ…」

さっきの会話は、雪子のツボにハマったらしい…。
すると、紫色の光が自分の身体に飛び込んできた…。

『見つけた！お姉ちゃん！』

ぐぁ！
リュウタに自分の身体が支配された。いつの間にか帽子を被っている…。
すると、雪子は急に笑いを止めた。

「あっ、リュウタ君」
『ん？このお兄ちゃんと、なにしてたの！？』
「ぶぇえ！」

雪子の顔が真っ赤になった。

「ちょっ、リュウタ君には関係なっ…、いや！なにもしてないから！！勘違い、ダメよ！勘違いは！オホホ…」
『なんで、そんなに必死なの？』
「いや、必死じゃないから！？」
『あっ、わかった！』
「いっ！」

雪子の顔が真っ赤を越えて、火が出てきた。

『かくれんぼでしょー』
「あっ！そっ、そよー、そうよー、オホホー」

雪子の顔が元に治まった…。

「そっ、そだー！ここで、お絵かきしましょうか？」
『うん！』

雪子は気を取り直して、リュウタ自分と、お絵かきすることにした…。
雪子は画用紙とクレヨンを持ってきて、リュウタ自分と、この部屋のテーブルの上でお絵かきを始めた。
リュウタ自分は、例のデンライナーという乗り物の室内の絵を描いた。

『でねー！ここには、ナオミちゃんが居てー、ここには、オーナーさんが居てー、チャーハンをねー。たまに、オデブちゃんと悠斗が来てー』
「へぇー、凄い賑やかなんだー」

リュウタ自分が無邪気に、雪子に元の世界の話をしている…。

そして、一人の青年の絵を描いた。

『んで、これが良太郎！』

「へぇ…、この人が噂の不運な人…」

『で、良太郎にはね、お姉ちゃんが居て…、っ…』

急に、リュウタ自分の口がどもった…。

「リュウタ君…？」

『…』

様子が変わったリュウタの様子を、雪子が不安げに見つめた。

『お姉ちゃん…』

急にリュウタは塞ぎ込んだ…。

どうやら、元の自分達の世界のことを思い出してしまったようだ…。

やはり、元の世界に帰りたいようだ…。

それに、この良太郎という人のお姉ちゃんに対して、リュウタはなにか強い気持ちがあるのを、自分の身体で感じた…。

「ごっ、ごめんね…。元の自分達の世界のことを思い出させちゃって…」

雪子が、リュウタ自分に謝った。

『えっ？ゆっ、雪子お姉ちゃんは悪くないよ！』

すると、リュウタ自分が顔を上げた。

『たっ、ただ、なんか雪子お姉ちゃん…、良太郎のお姉ちゃんに似てたから…、あっ、別に雪子お姉ちゃんが悪いとかじゃなくて！！えーっと…、えーっと』

リュウタ自分は、かなり焦っている。

「やっぱり、寂しいよね…。自分が居た場所から、違う場所に行くのは…」

雪子はリュウタ自分の頭を撫でた。

「私だったら、耐えらんないな…。知らない場所にいきなり連れてこられて、元の場所に帰ってこられなくなっちゃうかもしれないなんて…」

『雪子お姉ちゃん…』

どうやら、雪子は自分のことを重ねながら話している…。

「そう思うと…、今こうして、みんなと笑ってお絵かき出来るリュウタ君は強いと思うよ…」

雪子の顔が、女将を継ぐと決めたあの日のように大人びて見えた…。

『雪子お姉ちゃんも、ここを離れたら寂しい？』

「うん」

『それって、やっぱり、雪子お姉ちゃんにとって、ここが大事だから？』

「うん。そうよ、私にとって、ここがとっても大事な場所だから！」

雪子は笑顔で答えた。
すると、リュウタ自分も笑顔に戻った。
「ねぇ、リュウタ君…！また、そのリュウタ君の世界の話を聞かせて！」
『うん！いいよ！』

雪子とリュウタ自分が、また楽しそうに話を始めた…。
これ以上、2人の邪魔をするのは無粋だと思い、自分の意識を閉じ、そっとしておくにした…。

外の雨が止み始めている…。そして、霧がだんだん強くなって来ている…。
どうも、嫌な予感がして仕方ない…。
だが、なにも解らない以上、今は待つしかない…。
明日を待つしかない…。
そう思い、今は意識を閉じて休むことにした…。

一方、その頃…。
宴会場…。

5回戦目の王様ゲームをやっている…。
赤いくじを名護さんが引いた。

「うははは…、やったぁ…、やったぞ…！！俺の…、俺のくじだぁ！！あはははは！！」

恐怖の表情を浮かべて、名護さんが喜んでいる…。
その姿に、千枝、りせ、直斗が怯えている…。

「私が王様だ…！よし、今すぐ、こんなくだらない会合はやめて帰りなさい！」

赤い割りばしを引き当てた名護さんが楽しそうにしている…。

「なに、この人…。超ウザイ…、疲れる…。なんか、タロウズより疲れる…」

場酔いしていたりせは勢いをなくし、完全に目を覚ました…。
千枝、直斗は早く帰りたい…、早く帰りたい…と呟いている…。
キンクマは、ぐっすり眠っている…。

時間は、もうすぐで明日を示す…。
雨が止みそうだ…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9489g/

ペルソナ４　～仮面ライダー電王＆自称特別捜査隊～

2010年10月11日10時58分発行